# |狂戦士《ベルセルク》の名を冠するモビルスーツ

晴月

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

火星のとある企業　その名をＣＧＳという。

そこでは身寄りの無い少年達が雇われ、日々従業員達のサンドバッグのような扱いを受けていた。そんなある日、主人公　神影（ミカゲ）達に火星の独立運動をしている代表、クーデリアの護衛任務が依頼される。だが、突如ギャラルホルンからの敵襲がミカゲ達を襲う。三日月はバルバトスに、ミカゲは黒いモビルスーツ《ベルセルク》に乗り、敵を退ける。　果たして、ミカゲ達は無事クーデリアを地球まで無事護衛することが出来るのか。

# 目次

第1期　CGS編
第一話　物語の始まり　1
第二話　起動する狂戦士　11

# 第1期　CGS編
## 第一話　物語の始まり

ある場所で青年は一人、パソコンに向かって何かを入力していた。
青年の名は　神影（ミカゲ）・月読（ツクヨミ）。
彼はハッカーとしての能力を持ってはいたが、今彼が行っているのはただの事務作業である。
「・・・・　よし、これで完了っと。」
ミカゲはパソコンのエンターキーを叩くと作業を終えてパソコンを閉じる。
「こっちは終わったぞ！」
「応、ミカゲ。助かったぜ！」
ミカゲが声をかけたのは同僚の白髪で褐色肌の青年　オルガ・イツカ。
彼はミカゲの幼なじみだ。
「オルガー、こっちも終わったぞ。」
次にオルガに声をかけたのはミカゲのもう一人の幼なじみ。
三日月・オーガス。通称ミカだ。
「そうだった。オルガ、ミカゲ社長が呼んでたよ。」
三日月の言葉にオルガとミカゲは互いに顔を見合わせるのだった。

---

「クリュセ独立自治区。その代表の娘を地球まで運ぶ。そいつの護衛をお前ら参番組に任せる。」
社長のマルバはオルガとミカゲに言い放った。
そしてまたミカゲとオルガは顔を見合わせる。
「あの・・・　代表の娘ってクーデリア・藍那・バーンスタインですか？」
ミカゲは自分の耳を疑いつつも社長にそう聞く。
「知ってんのかミカゲ？」
「えっと確か独立運動を行っていると聞いてます。」
「今回の地球行きも、その独立運動絡みらしい・・・　ご立派なことだ。」

ミカゲはまたオルガと顔を見合わせる。
「でもそんなデカイ仕事・・・ 何で俺らに？」
オルガはこの仕事がどれだけ重要な仕事なのかを理解していた。だが、何故自分達にその仕事を任されたのかそれを疑問に思い社長に質問する。
「お嬢様直々のご指名なんだよ。」
「えっ？・・・ それって、」
「形はどうあれ、やることは何時もと変わんねぇ！お前らガキ共はしっかり大人の言うこと聞いてりゃいいんだよ！」
と社長の近くにいた男がミカゲ達を罵倒する。
ミカゲとオルガは文句を言いたかったが、自分達は雇われている従業員である為、何も言わずにただ男を睨むだけだった。

---

「・・・・ ったく、あり得ねーよ地雷設置訓練なんてよー。」
「ただの虐めだろ、下は撤去訓練だぜ。」
「マジかー。」
その時、近くで戦車のような兵器モビルワーカーが三台。互いに撃ち合っていた
「かっけーなぁ、いつか俺も、」
「チンタラやってんじゃねぇ！」
と、少年の顔にムチが入る。
どうやらここでの少年達の扱いはまるで奴隷同然の扱いのようだ。

---

「俺たちがお嬢様の護衛？」
「お嬢様っていー匂いするんだろうなぁ！なぁ、三日月！」
と、昼食の時間にユージスと、タカキに仕事内容を話すとそんな答えが帰ってきた。
「お嬢様って言っても同じ人間なんだし、そんなに変わんないだろ？」
と、タカキの質問を一蹴する三日月。
「やれやれだな。」
と、だけ返すミカゲ。

「でもよ、アレだよな！社長もよ！口先だけの社員より俺らの力を認めてるってことなんじゃねぇの？・・・　ここでよ、社員の奴ら出し抜いて俺らが一軍になって！」
「いくらマルバの親父が納得したって使い捨ての駒くれーにしか思ってねぇ俺らを認める訳ねーだろ。」
　と、半ば諦めているオルガ。ユージンはオルガを睨んで異を唱える。
「オイ、俺ら参番組のお前がそんなだからいつまでたってもこんな扱いなんじゃねぇか！」
　と、反発するユージン。
「止めなよユージン。」
「うっせぇビスケット。てめえは黙ってろ！・・・・　大体テメーは、アイタタタ！」
　ユージンにそれ以上の発言は許さないとばかりに耳を引っ張る三日月。
「喧嘩か？ユージン・・・・　俺は嫌だ。」
「取れる・・・・　取れるって！」
「そこまでにしとけって三日月。」
　とミカゲがユージンに助け船を出して事なきを得る。
　するとオルガの後ろの席に座っていた男　昭弘が席を立った。
「悪いな昭弘、騒がしくってよ。」
　それに対して昭弘は、
「別に・・・・　何時ものことだ。」
　と、冷たく返すだけだった。

---

　その日の夜。全員同じ大部屋に寝ており、その内三人が見回りを行う事になっている。だが、その中にミカゲは居ない。
　彼は今、建物の屋根に登り、月を眺めていた。
「いよいよ明日か。・・・・・・・」
　そして夜空を見上げ、明日の仕事に向けて意気込むのだった。

---

そして次の日、
「参番組、オルガ・イチカ以下四名到着致しました。」
オルガ達四名が社長室に集まった。その中にはミカゲも居る。
「こいつらが護衛を勤める予定の・・・・ うん？」
するとクーデリアはオルガ達に向き直り、
「初めまして、クーデリア・藍那・バーンスタインです。」
暫しの間沈黙が続いたが、
「はい。」
とだけ返すオルガ、
「宜しくお願いします。クーデリアお嬢様。」
と礼儀正しく返すミカゲ。だが、
「てめえら！誰に対して口聞いてんだ！」
と社長にどやされる。
（・・・ っち、やっぱそう返すのかよ。）
と心の中で悪態をつくミカゲ。
「・・・・ ったく、では改めてこれからの連絡を。」
と話を戻そうとした社長だったが、
「あなた。」
「うん？」
不意に声をかけられた三日月。
「お名前は？」
「三日月・オーガス・・・・・ です。」
「三日月、此処を案内して貰えますか？」
「はい？」
「え？」
クーデリアの突然の提案に唖然とする社長とミカゲ。
「フミタン、此処は貴方に任せるわ。」
フミタンと呼ばれた女性はなにやら少し不服そうであったが、クーデリアの指示に従った。
「では三日月。」
クーデリアが三日月に手を差し出すが、三日何の事やら分かってい

ない様子である。
「‥‥　此方へ。」
三日月はそれだけ言うとその場を後にした。

---

その日の夜。何時もの様に夜空を見上げていたミカゲだったが、
「‥‥　！」
空に打ち上げられた白い閃光弾を見ると直ぐに屋根から飛び降り、
ある場所に向かう。
一方オルガは、
「状況は？」
「遅ーよオルガ！‥‥　三日月と昭弘の舞台はもう行っちまった。」
ユージンに現在の状況の確認を取り、出撃の準備を行っていた。
するとそこに、
「何やってるんだ！参番組は敵の攻撃を抑えろ！」
とまたしても社長室にいたあの男だった。
「敵って、敵の正体が分かったんですか？」
オルガは男にそう聞くが、男はただ、身じろぎするだけであった。
その頃、三日月はタカキ達と共に敵の機体の進行を抑えていた。
「来る！」
三日月の言葉の後、直ぐに出来新たな兵器が進行してくる。
その機体に付けられたマークを見て、タカキは戦慄する。

---

「ギャラルホルンだって!?」
「どうしてギャラルホルンが！」
「いいから外に出ろ！」
オルガ達の意見を遮り、男が命令するが、
「一軍は、本隊はどう動くんです？連携は？」
オルガが確認するために男達にそう聞くが、
「お、俺達は回り込んで背後を討つ。だからそれまでお前達で相手をしっかり抑えておけ！」
そう言い残してその場を去った。するとビスケットがオルガに話

しかける。
「オルガ。ウチの動力炉以外にエイハブウェーブが観測されてる。」
「え？」
「相手がギャラルホルンなら、もしかすると。」
ビスケットの言葉を聞き、オルガは少し考え、
「ビスケット、頼みがある。」
その言葉に答えるようにビスケットは頷く。
一方三日月はというと、
ギャラルホルンの機体の接近にいち速く気付き、タカキと同時に下がりながら砲撃を行う。
「助かったぜ三日月！」
「このくらいなんとも・・・・　しかし、数が多い・・・　弾の残りも、」
「シマの隊は一旦下がれ！ダンテの隊と交代で補給だ！」
突如オルガからの指示が三日月達に下る。
「遅ーぞ！」
「悪いな、ミカと昭弘も戻れよ。」

---

一方、ビスケットはというとクーデリアを逃がす為、部屋から連れ出していた。
「あの・・・・・　何処へ行くのですか？」
「・・・・・・・」
ビスケットは何も答えず、扉のパスワードを入力していた。
「私はフミタンを待たねば、」
「あのまま部屋にいたら死にますよ！」
厳しいようだが、事実をクーデリアに伝えるビスケット。彼はそう言うと再度パスワードのロック解除作業に戻る。
そして扉を開け、その部屋に入っていく。クーデリアも恐る恐るだが、後を追うように部屋へと入る。
「・・・・・・　わぁ。」
するとそこには人型の白い人型の機体と黒い人型の機体　モビルスーツが管に繋がれていた。だが、その装甲はあまり着いておらず骨

格フレームが丸出しになっている。
その二体のモビルスーツを動かそうとして整備を急いでいる人物達、その中にはミカゲも居た。

---

「参班、もう少し耐えてくれ・・・・ 時期に応援が到着する！ゴハン突っ込みヤバい！押し負けるぞ！・・・・ ユージン移動！」
全ての部隊に指示を出し、何とか持ちこたえていた。
「オルガ！」
「ビスケットか・・・ そっちはどうだった？」
直ぐにビスケットから通信が入ってきた。
「予想が当たったよ・・・・ 悪い方の、一軍は今、社長と一緒に全速力で裏口から離脱中。」
「おいおい、どーすんだよ！俺達このまま犬死にかよ!!?」
ユージンは衝撃の事実に驚愕し、戸惑いを見せる。
「いーや違うな、それじゃ筋が通らねぇ。・・・・ なぁ、ビスケット？」
「だね。」
オルガはユージンの言葉を否定し、ビスケットに言葉を返す。
するとビスケットは何かのスイッチを入れた。
すると裏口から離脱していた一軍のモビルワーカーから赤い信号弾が発射される。
「な、なんだありゃ!?一軍か？」
「ああそうだ。・・・ どうやら俺達の為に”囮”になってくださるみてぇだ。」
オルガは悪い顔でそう言った。
信号弾が発射された方角へと敵のモビルワーカーが移動していく。

---

クーデリアはその頃、モビルスーツの格納庫にてミカゲ達の整備を見守ることしか出来ないでいた。
「あの！私も何か・・・」
「お嬢さんは危ねーからずっとさがってな！」
怒号を飛ばす整備士　ナディがクーデリアには近づくなと言い放

つ。
クーデリアは少し不服そうだ。
「ホントに離れててくれ、‥‥ じゃないと命の危険があるんだから。」
機材を運びながらクーデリアを諭すミカゲ。
「貴方‥‥ あの時の。」
「神影・月読だ、宜しくクーデリア。」
ミカゲは自分からクーデリアに手を差し出す。
「こ、こちらこそ宜しく‥‥ ミカゲ。」
クーデリアは慌てて手袋を外し、ミカゲと握手する。
「今はこいつらを動かせるようにする為に俺らが整備してるんだ。」
「このロボットを?」
クーデリアが疑問符を浮かべながらそうミカゲに聞く。
「ああ、整備が出来るのが俺を含めて三人しかいなくてね‥‥ だから今、こうして整備してる所さ。」
ミカゲは仕方がないと言わんばかりにクーデリアに説明する。
「オイミカゲ!早く来い!」
「おっとどうやらお呼びみたいだ‥‥ それじゃ、また後で。」
ミカゲはクーデリアを一瞥するとそのまま呼んだ声の主の元へと走っていった。

---

オルガ達の方はというと、
ギャラルホルンのモビルワーカーはオルガの作戦通り、一軍の方へと向かっていく。だが、
突然、一台のモビルワーカーは爆発する。
「あれは、」
「俺達の埋めた地雷!?」
爆発したモビルワーカーの通った地面には埋められた地雷が設置してあり、その事を知らなかったギャラルホルンのモビルワーカーは次々に地雷の餌食となっていく。
「さぁ、反撃開始といこうか!!」
だが、突然銃砲が鳴り響く。

「銃砲!?」
「これは!?」
　オルガ達の目の前に現れたのはモビルスーツだった。しかし、格納庫に格納されていたものと違い、単眼のモビルスーツ　ゲイレールと呼ばれる機体だった。
『全く、この程度の施設制圧に何を手間取る!!』
　そして続けて同じモビルスーツが二体登場する。
「冗談だろ!?モビルスーツなんか敵う訳ねぇ。」
「どうすんだよ、オイ。」
「逃げなきゃ。」
「何処に?」
　モビルワーカー隊の面々が弱音を吐く。だが、
「そうだ、何処にも逃げ場なんてねぇぞ…　はなっからな、なぁミカ?」
「うん。…　で、次はどうすればいい…　オルガ?」
　隣にいた三日月がオルガから次の指示を聞く。

---

『まるで虫けらだ!アッハッハ!』
　ゲイレールは周囲のモビルワーカーを破壊しようとライフルを撃ち続ける。
　そして遂に、
「なんかこっち見てる!!?」
『貴様が!指揮をしているのか?』
　モビルスーツから声がきこえ、オルガを執拗に狙い始める。
「死ぬ死ぬ死ぬ!!」
　ライフルからの攻撃をかわしながらユージンは逃げる。
「死なねぇ!…　死んでたまるか!!…　このままじゃ、こんな所じゃ…　終われねぇ!!!」
　オルガの乗ったモビルワーカーがゲイレールに突っ込んでいく。
　ゲイレールは勝機とばかりに持っていた斧を振り上げる。
「だろ、ミカ?」

すると目の前で土煙が上がり、中からあの白いモビルスーツがメイスを振り上げながら飛び出してくる。
白いモビルスーツのメイスはゲイレールの頭部に直撃し、破壊する。
「うん、行こう。・・・・　俺達、皆で！」
三日月は血を顔から流しながらそう呟いた。

# 第二話　起動する狂戦士

バルバトスがグレイズの頭部をメイスで破壊し、行動不能にする。

「マジかよ…　ホントにやっちまった…　！」

「あれに三日月が…？」

「乗ってるっていうのか…？」

モビルワーカーから姿を見せたシノと昭弘が戸惑いを見せる。

「そ、そんな…　モノリス隊長が…　此所にモビルスーツがあるあんて情報は無かったのに…　！」

グレイズのパイロット　アインも驚愕し、

それにしても何故、モビルスーツが土煙の中から飛び出してきたか。

---

数時間前、三日月はモビルワーカーを”とある”格納庫へと移動させていた。

「おやっさん、入るよ。」

三日月はそこで再びクーデリアと出会った。

「三日月…」

クーデリアはこんな子供が戦っているのかと少し悲しい気持ちになった。

「おう、来たか三日月！」

おやっさんは三日月が乗ってきたモビルワーカーを分解し、その中から使えそうなパーツを白いモビルスーツへと移植していく。

「これどうすんの？」

三日月は白いモビルスーツを見ながらおやっさんに聞く。

「これは元々転売目的でマルバが秘蔵してたもんでな、コクピット周りは使う用がねーからごっそり抜かれちまってたんだ…　だからこいつを利用する。」

おやっさんが外したそれは阿頼耶識（あらやしき）システムと呼ばれるシステムである。

「モビルワーカーのシステムで動くの？」
「ああ、システム自体は元々あったものを使う・・・・ ほれ、一応目を通しておけ。」
　おやっさんは三日月に説明書らしきものを渡すが、三日月は読めないからと、受け取らなかった。
「あーそうだったな・・・・ まぁ、欲しいのは阿頼耶識のインターフェイスの部分だけだ、大戦時代のモビルスーツは大体このシステムが━━」
「阿頼耶識？・・・・ それは成長期の子供にしか定着しない特殊なナノマシンを使用する危険で人道に反したシステムだと━━━」
「ナノマシンによって脳の空間認識を司る器官を擬似的に再形成し、それを通じて概念を切り・・・・ この場合、モビルスーツの情報を脳で処理できるようにするシステムだ。」
　クーデリアが否定しようとした阿頼耶識システムをおやっさんが出来る限り詳しく説明し、クーデリアを無理矢理納得させる。
「いいよ。」
「よし。」
　三日月はモビルスーツのシートを外し、インターフェイスを接続できるようにする。
「こんなものが無けりゃあ、学も無ぇこいつらがこんなものを動かせる訳ねぇーだろ。」
「ですが！」
「クーデリア。」
　突然、クーデリアを呼ぶ声が真横から聞こえる。
「さっきぶり。」
　振り向くとそこにはミカゲが立っている。
「まぁ、そう言わないでくれ・・・・ これが無かったら、俺達は今頃全員死んでるんだからさ。」
「でも！」
　クーデリアは納得がいかないのかまたもミカゲに食らいつく。
「ハァ・・・・・ 仕方ない。」

ミカゲは嫌々ながら上着を脱ぐ。
「クーデリア、見てみろ。」
ミカゲは背中をクーデリアに見せる。
「……!!
!!」
ミカゲの頚椎にあたる部分には阿頼耶識のインターフェイスを接続できるようにするための管が取り付けられている、それも三日月のものと比較するとおよそ”二倍”の量である。
「此処にいる俺達は全員”これ”を付けられている……でなけりゃ俺達は本当に行き場を失う。」
そう言って脱いだ上着を着直す。
「別に俺は阿頼耶識システムを”認めろ”と言いたい訳じゃない……ただ、”受け入れろ”と言ってるんだ。」
「わ、私は……」
クーデリアはミカゲの言葉にそれ以上何も言えず、ただ黙っていた。
「それとおやっさん、”こっち”の整備は終わった。」
ミカゲは隣の”黒い”モビルスーツを指差しながら答える。
「おう、なら後は燃料を入れてくれ。」
「了解。」
ミカゲは燃料が入ったタンクを取りに走っていく。
その様子を見終わった後、三日月に話を戻す。
「けどな三日月、モビルスーツからの情報のフィードバックはモビルワーカーの比じゃねぇ。……下手したらおめぇの脳神経も――」
「いいよ、元々対して使ってないし。」
三日月はあっけらかんとして答えた。
「おめぇなぁ……」
おやっさんは少し呆れた様子で三日月を心配している。どうやら他の大人達とは何処か違う様子だ。
「何で？……そんなに簡単に……自分の命が大切ではないのですか!?」
やはりまだ認める事は出来ないでいる様子のクーデリアが口を開

く。
「大切に決まってるでしょ・・・ 俺の命も、皆の命も。」
三日月はそう答える。
「ああ。三日月の言うとおり、俺にとってもそうだ。」
そこにミカゲもやってくる。
「あんたは何も知らないだろうがな、俺達にはこれしかないんだ・・・・
おやっさん、そっちが終わったらこっちも頼む。」
「おう。」
「私は・・・・」
クーデリアはもう、何も言わなかった。

---

三日月が白いモビルスーツ ”バルバトス” を動かし、三番ゲートから出ていった後、
「次は俺の番だ、頼むぜおやっさん。」
「おう、といってもこっちは外骨格フレームが持ってかれてるだけで殆ど持ってきた頃と変わらねぇ・・・ 阿頼耶識システムのインターフェイスも付いたままだ。」
次は黒いモビルスーツにミカゲが搭乗する番である。
「起動するぞ。」
起動するとコックピットのモニターには『ＧＡＮＤＡＭ Ｆｒａｍｅ ＢＥＲＳＥＲＫ』と表示される。
「ガンダムフレーム ベルセルクか・・・・ 面白れぇ・・・ ！狂戦士の名を冠する機体とはな。」
ミカゲは嬉しそうに笑いながら座席に座り、インターフェイスを接続する。
「ぐ、ぐおおおおおお!!」
接続した途端、ミカゲが苦しそうに悶え始め鼻から血を流す。
「ミカゲ！」
おやっさんが心配そうにミカゲに声を掛けるが、
「大、丈夫だ。・・・・ このくらい、一軍（あのゴミクズ共）と社長から受けた暴力に比べたら・・・・・ 痛くも痒くもねぇ！」

明らかに強がりである・・・ だがそれでもオルガやビスケット、三日月達を守るために自分が戦わなければならないと思い、こうしてミカゲは苦しんでいる。
「三番・・・ ゲートは開いてるか？」
「は、はい！まだ開いてます。」
「なら、直ぐに出られるようにしてくれ。」
ミカゲの指示に従い、三番ゲートに黒いモビルスーツ　ベルセルクをゲートから射出する。
「よし、後は敵の位置を・・・・ !!」
ミカゲが見たもの、それは二体のグレイズに翻弄されるバルバトスの姿であった。

---

バルバトスは二体のグレイズを相手に奮闘し、

「くっそ、まだ身体が・・・・。」
どうやら初めて操作するバルバトスに苦戦しているようだ。
当然そんな敵の隙を狙わない敵ではない。
「貰った！」
ゲイレールが剣を振り上げたその時、
突如として剣がグレイズの目の前にあった地面に刺さった。
「よぉ、待たせたな三日月。」
「ミカゲ・・・ !?」
三日月は戸惑ってしまった。それもその筈、まさかもう一機のモビルスーツにミカゲが乗ってくるとは思いもよらなかったからだ。
「俺が来たからにはもう安心だ、早いとこ全滅させちまおうぜ！」
「・・・・ 分かった。」
（相変わらずの塩対応・・・・ まぁ、三日月らしいと言えばらしいが。）
ベルセルクは投げた剣を掴み取るとゲイレールに向けて剣先を向けた。
「やってやろうじゃねぇか!!!!!」
ベルセルクが敵に突っ込んでいく。

剣をまるで棒切れを振り回すかのようにゲイレールに向かって切りつける。
「オラオラァ!!どうしたぁ!掛かってこいよ!」
ベルセルクでゲイレールを煽るミカゲ。
「貴様!言わせておけば!」
煽られたゲイレールが怒り狂ってベルセルクに襲いかかろうとする。だが、
「ぐあっ!」
その隙を突いて、三日月の操るバルバトスのメイスによって頭部のフレームを外される。
突如、土煙がベルセルクとゲイレールの眼前で発生し、ベルセルクは動きを止めた。
「くっ……何も見えない……!」
土煙が晴れると目の前にゲイレールは居らず、遠くに撤退していく二機の機体が確認できる。
「逃がすか……!」
バルバトスは追い討ちをかけようとしてスラスターを展開するが、
「?……起動しない?」
どうやら整備の際、スラスターの燃料を入れ忘れたようでガス欠になったようだ。
「……逃げられたか。」
仕方ないと言わんばかりにミカゲはベルセルクの動きを止めた。

---

「この野郎!」
一軍の奴らが戻ってきた後、オルガ達六人は呼び出され、その内の一人、ハエダに殴られていた。
(コイツら……自分達は逃げた癖に、俺らを殴るのか……!!)
ミカゲは血が滲む程に拳を握りしめ、顔を背けながら怒りを必死で押さえ付け、ただひたすら終わるのを待った。

---

そしてハエダの気が済み、オルガが血塗れでその場に倒れる。

「オルガ!!」
ミカゲが駆け寄り、傷の手当てを行う。
「くっそ、あいつら許さねぇ!!」
シノが怒りを剥き出しにして拳を作る。
「そうだな、許せねぇな・・・ ちょうどいいのかもな。」
ふと、オルガが意味深なことを口にした。

---

その暫く後、物置と化したスペースにて
「ただ、私はそれを確かめてからでないと帰れません。」
クーデリアが付き人のフミタンと何かを話している最中のようであった。
するとそこに、
「〜♪」
口笛を吹きながらミカゲが現れ、高く積まれた木箱を上から取り、何処かへ持っていこうとしていた。
「ミカゲ!?」
「ん?・・・ あぁなんだ、クーデリアか・・・・・ 何でこんなところに?・・・・・ というか、帰ってなかったんだ。」
キョトンとした様子でミカゲはそう呟いた。
「先程は守って頂き、有り難う御座いました!」
クーデリアはミカゲに対して感謝の言葉を投げ掛ける。
「・・・・ 別に、俺だけがあんたを守った訳じゃない。・・・ 礼なら今回のMVPである三日月とオルガにするんだな。」
ミカゲはまるで今は話したくないと言わんばかりにその場を立ち去ろうとする。
「・・・・ でも、私のせいで大勢の方達が──」
クーデリアがそう口にした瞬間、
「止めろ・・・ !」
怒りと殺意が篭った言葉でクーデリアの言葉を遮るミカゲ。
「あんたの為に皆が死んだ?・・・・・ 自惚れてんじゃねぇよ。」
ミカゲの言葉には、明らかな怒りが込められていた。

「あんたが何者だろうと関係無いが、俺の仲間を馬鹿にしてんのか？だからそんな事が言えるんだろ？」
「ち、違っ・・・　私は――――」
　ミカゲの憤りに対して戸惑ってしまうクーデリア。
「・・・・　まぁいい、どうせ死んだ奴らはもう帰ってこない。」
　最後にそう呟くとそのまま何処かへと行ってしまった。
　ミカゲの放たれた言葉には、怒りだけでなく寂しさと悲しみが込められていたような感じであった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

　その日の夕方、
　ミカゲはオルガ達に呼び出されていた。
「来たぞ。」
「来たか、ミカゲ・・・・　これで全員か。」
「いや、三日月がまだ来てない。」
　その場にはミカゲ、オルガ、ビスケット、シノ、ユージンの五人が集まっており、何かを話し合う為にミカゲは呼び出されたのだろうと考えていた。
「さて、お前ら・・・　このままあいつらにいい顔させたままでいいと思うか？」
　ふとオルガが全員に尋ねた。
「良い訳ねぇだろ！・・・・　あいつら何時も何時もいい気になりやがって。」
　オルガの問いかけに対してシノが怒った様子で答えた。
「なら、俺に考えがある・・・・・　あーでも、三日月が反対したらお前らには悪いがこの計画は無効になる。」
「「はぁ!?」」
　シノとユージンが此処まで来てか！といった様子でオルガに抗議する。
「心配すんな、あいつは俺の言うことに反対はしないさ。」
　果たしてオルガの策とはどんなものなのか・・・

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

その日の夜、
ビスケットが一軍に料理を配膳していると、
「オイ！俺のは具が少ないじゃねぇか！」
またもや因縁をつけては暴力に訴えるハエダ。
ビスケットは蹴られた衝撃でそのまま部屋の外に出ていく。
そしてこれが彼らがＣＧＳとしては最後の晩餐になるとは誰も予想はしていなかった。

---

皆が寝静まった頃、
「・・・　ん？なんだこれは？」
ハエダが目を覚ますとそこには縛られた一軍の奴らが見えた。
「お目覚めかい？・・・　無能共。」
扉を開けて最初に入ってきたのはミカゲであった。
「おはようございます。」
次に入ってきたのはオルガであった。
そしてそこからゾロゾロと三日月やビスケット達も集まってきだした。
「薬入りの飯の味はいかがでしたか？」
オルガが挑発するように言う。
「薬だァ？・・・・・　餓鬼が何の真似だ！」
ハエダが挑発に乗り、オルガを恫喝する。
「まぁ、ハッキリさせたいんですよ・・・・・　誰がここの一番かってことを。」
「ハァァ!?」
「餓鬼共！貴様ら一体誰を相手にしてるとを――」
「ロクな指揮もせず、これだけの被害を出した無能をですよ。」
オルガが怒りの篭った言葉でハエダに言い放つ。
「ふっ・・・　ふざけるな！」
ハエダは忌々しそうにしてオルガの目の前で唾を吐き捨てる。
それに対してオルガは、
「ぐはっ!!」

ハエダを蹴った。それもその筈、今まで散々殴られ蹴られてきたのだ、そして今まで蓄積された怒りが今、解放されたのである。
「わ、分かった・・・・ 分かったから、取り敢えずこいつをとれ、そうすれば、」
「そうすれば・・・ 何だ？・・・ 散々やってくれたな餓鬼共、って言って殴るんだろ・・・ 今までみたいにな！」
ミカゲがハエダの顔に向かって蹴りを入れた・・・ するとプチッ、と何かが潰れる音が響いた。
「ギャアアアア!!!目が・・・・ 俺の目がぁぁぁ!!!」
見るとハエダの左目が無くなり、必死で痛みを身体全体で表現している。
「どうやら、自分の今の立場が分かって無いみたいだな。・・・ というかミカゲ、お前・・・」
「どうせ言うこと聞きゃしねぇんだからよ・・・・・ こうした方がいいだろ？」
「・・・ まぁ、いいか。」
オルガは何か言いたげだったが、今まで自分達の為に尽力してくれたミカゲに、もはや何も言うまいと思うのだった。
ハエダがミカゲを見ると、その顔は普段の彼の物ではなく・・・ 例えるならば地獄の閻魔のごとき表情となり、ハエダを見据えていた。
「どうやら自分達が置かれている立場ってものが分かってないらしいな・・・・・ 仕方ない。」
ミカゲは三日月を近くに来るように指示する。
「何？ミカゲ。」
「拳銃貸せ。」
ハエダはミカゲの言葉を聞き、自分がこれからどうなるのかを嫌でも悟った。
「？・・・・ いいけど、何する気？」
「ま、待ってくれ、頼む！」
「決まってんだろ。」
ミカゲはハエダの静止の言葉を無視して銃口を向けると、

「こうすんだよ。」
冷たく言葉を発してそのまま撃ち、ハエダを殺した。
弾はハエダの頭部、場所で言うと額の位地を貫通しており即死であった。
「て、テメェ!!!」
金髪の男が掴みかかろうとするも、
ドンッ!と再度、銃口から火花が飛び散り、今度は奴の足に銃口を突き付けるとミカゲは奴に見向きもせず、撃った。
「あああああ!!!・・・・ あ、足がぁぁぁぁぁ!!!」
撃たれた男が悲鳴を上げ、のたうちまわる。
「ガタガタうるせぇぞ!・・・・ てめぇらも俺らに同じ事をしてきただろ?・・・ だからこれは、てめぇらに対して俺からの制裁だ。」
一呼吸おき、ミカゲは拘束した彼らを見据えて再び言葉を発する。
「さぁ選べ、オルガを社長としたこの会社で再び働くか・・・・ それともここを出ていくか・・・ 二つに一つだ。」
ミカゲが選択肢を挙げる。一応これは、今以上に自分達に被害が及ばない要にするためでもある。
「ふざけんな!・・・ ガッ!!」
ミカゲに反発した男は、何とか立ち上がってミカゲに向かっていくも、その場で射殺される。
「あ、因みにどちらも選ばなかった場合は、そいつみたいに惨たらしく殺すから。」
ニッコリと笑いながら男達に笑いかける。
「そこまでだ。」
ミカゲの企みを静止するためにオルガがミカゲから拳銃を取り上げる。
「ミカゲ、やりすぎだ・・・・」
「・・・・ 悪い。」
流石にやり過ぎたと反省しているのか、オルガの後ろに下がった。
「わ、私は出ていく・・・ !」
ＣＧＳの経理担当であるデクスター・キュラスターがミカゲ達の態

度に恐怖し、そう告げたが、
「あの、経理担当のデクスターさんですね。」
ビスケットが彼に待ったをかける。
「貴方には、もう少しだけ残って貰いたいんですが・・・」
「えぇ・・・」
デクスターは、明らかに嫌そうな顔をして項垂れた。
この時の事を、後にミカゲは語る。
あの時引いた引き金は、どんな物よりも軽かったと・・・・

---

「オイオルガ！お前、辞めてく奴らに退職金払ったって!?」
後日、ユージンがオルガを問い詰めるために社長室に乗り込んできた。
「俺たちはこれからクリーンな会社をやってくんだ、変な噂とか立てられちゃ困るんでな。」
「そうそう、俺たちは新しくなった会社でやっていくんだ。」
「・・・って、何でコイツがここにいるんだ!?」
ユージンの指差した方向には、壱番隊の一人　トド・ミルコネンが立っていた。
「これから宜しくな。」
「・・・・」
ユージンはトドの態度に何かありそうな気がしたが、そこで思考を中断した。因みに、ミカゲはと共に今後元ＣＧＳを運営していく為に残った資金を遣り繰りした場合の計算を行っているらしい。
「計算結果が出たぞ。」
ミカゲの一言でオルガ達が彼に注目する。
「少ないな・・・」
そこにはデクスターとミカゲが一軍達の退職金やＭ（モビルワーカー）Ｗの修理維持費を差し引いた金額分の結果が出ていた。
「仕方ない。殆どはマルバのクズが持っていったからな・・・　奴から巻き上げられればもう少しやっていけると思うが・・・　生憎、奴の所在は掴めないままだ・・・」

今後この会社を運営していく為にこの問題をまず一番に解決する必要があるのだがいい解決策が浮かばない。いや、浮かばないというより、正攻法では難しいと考えており、どうしたものか・・・と頭を悩ませるのだった。

---

「失敗しただと!?」

今回の作戦の失敗を聞き、司令官であるコーラルが怒鳴る。

『指揮官であるオーリス・ステンジャが死亡、三割の兵とグレイズ一機を失い止むを得ず撤退を――』

「ふざけるな!!」

更に損害状況を聞かされて机を叩き、クランクを再度怒鳴る。

「独立運動の旗頭であるクーデリアが戦死を遂げ、火星は今以上の混乱に陥り、地球への憎しみを強くする。そういう手筈だったのに・・・」

『相手は・・・子供でした・・・』

クランクは動揺しているのか、声が震えていた。

「子供?雁首揃えてガキ共にしてやられたと?」

『子供を・・・少年兵を相手に戦争など出来ません!彼らが自らの意志で戦っているとは思えない!!』

クランクはミカゲ達を戦うべき相手ではなく、守るべき存在であるとコーラルに力説するが、

「甘い事を抜かすな相手が子供だろうと関係ない!!一人残らず駆除しろこれは命令だ!!絶対に失敗は許されんぞ!!」

そう言ってコーラルは通信を切った。クランクは軍人としての自分と本心の間でやるせなさを感じ、自分ではどうすることも出来ないと歯噛みするしかなかった。

---

「・・・・・」

格納庫内にて、ミカゲはカタカタとパソコンを打ちながら何かの作業を行っていた。

「ガンダムフレーム・・・約３００年前に起こった厄災戦末期に作られた機体の総称・・・現在は２３機が存在を確認済み・・・か。」

どうやら三日月が起動し、操ったモビルスーツについて調べていたようだ。
「その中には、あのバルバトスは含まれてないんだろうな。」
うーん・・・ と今度は別の問題で頭を悩ませるミカゲ。
「俺のベルセルクもガンダムフレームなんだよな・・・ でも、この検索結果の名称内にベルセルクの名前は含まれていない・・・・ ガンダムフレームの偽物？・・・ だとしてもあれはガンダムフレームのバルバトスと同じエイハブリアクターが二つ、横一列に接続されている・・・・ もしくは、更に過去に造られたモビルスーツ？例えば、厄災戦中期頃・・・ とかか？」
厄災戦とは、約３００年前に勃発したとされている惑星間規模の戦争のことである。 その戦争が起こった結果、規模が大きすぎた為、地球圏の統治機構は崩壊し、月は荒廃してしまった。
しかし、現在地球圏を支配しているギャラルホルンが発したヴィーンゴールヴ宣言により戦争は終結し、現在は四大勢力と呼ばれている貴族達が拮抗状態になっていることで平和が確立されている・・・ らしい。
「取り敢えずスラスターの燃料は補充完了。あとは、機動力だな。」
グレイズと戦ったあの時、グレイズよりかも軽やかに動いたが、それでもミカゲには、動きが遅いと感じた。
「下手すれば、バルバトスに劣る程だ。」
脚部の装甲か？と考えたが、あの時の事を思い出して気付いた。
「！そうか・・・ 武器だ！」
慌ててベルセルクのコクピットに入り、起動するミカゲ。
「やっぱり・・・ ！」
モニターには専用装備 『ドラゴンスレイヤー』と描かれた分厚い大剣のシルエットが浮かんでいた。
「こいつの質量がありすぎたせいでベルセルクは重かったんだ。」
だとすればどうすべきか？、ミカゲはモビルスーツの装甲に使われている素材 ナノラミネートアーマーの性質を思い出す。
簡単に言えば、ビーム兵器が全く通用しない金属のことである。

他の宇宙世紀ならばビームサーベルやヒートホークなどのビーム兵器があるが、この世界では質量を持った兵器や武装でないと、このナノラミネートアーマーを破壊することは出来ない。
対して、このドラゴンスレイヤーは分厚く重い。まるで鉄の塊のような大剣である。
「極力、装甲は薄くしないと・・・ なんだけど、せめて肩ｐａｒｔｓくらいは欲しいな。」
この武器はベルセルク専用装備と銘打ってる以上、三日月のバルバトスでも扱いが困難であろう。それはミカゲも理解していた。
だからこそ、戦いに於いて機動力を確保しながら専用装備を使う方法を模索する。
するとその時、
『敵襲、敵襲――――!!!』
けたたましい警告音と共に敵襲の知らせがミカゲに届く。
「！急がないと・・・ !!!」

――――――――――――――――――――

同時刻、
『我はギャラルホルン実働部隊所属　クランク・ゼント！そちらの代表と一対一の勝負を望む！』
襲撃してきたグレイズのパイロットの一人であるクランクが一騎打ちの決闘を申し込みにきたようだ。
『こちらが勝った場合、クーデリア・藍那・バーンスタインを引き渡してもらう。その代わり今回の一件は全て水に流すと約束しよう。』
「三日月？」
グレイズに近付いていく三日月、彼に並ぶようにして立つオルガ。
「やってくれるか？・・・ ミカ」
「いいよ。」
三日月がバルバトスに乗ろうと、格納庫に向かい――――
「いいや。」
二人の背後から声がした。
「!!」

「此処は俺がやる。」
「ミカゲ・・・！」
「向こうはこっちの代表と戦いたがっている・・・ なら、年長者である俺が適任だ。」
「・・・ でも、」
何か言いたげなオルガ。しかし、
「じゃあ三日月にやらせるか？・・・ 俺よりも年下の奴に・・・ 人を殺した責任を負わせるのか!!!」
「・・・・・」
ミカゲの目は、怒りに満ちていた。仲間を一人失い、ミカゲは決意した。”もう二度と仲間を失いたくない”と。その為なら、自分はどんな悪行にも手を染めよう。そう決意した。
「・・・ だからこそ、俺が・・・ 適任なんだ・・・ 頼む、オルガ・・・！」
先程とは異なり、弱々しくオルガに頭を下げたミカゲ。
「ミカゲ・・・ お前・・・」
もはや何も言うまいと、オルガは決めた。
「・・・ 分かった。ミカゲ、頼む。」
「・・・ 任せろ！」
空元気とも捉えられそうなミカゲの態度の変わりよう。
そして、
『待たせたな、俺が代表だ。』
ミカゲはベルセルクに乗り、グレイズの元へと現れる。
今、此処で決戦の火蓋が切られようとしていた――――